

バドミントンの楽しみ方

—生涯スポーツ論からみた4分類の検討—

岸 一弘

1 はじめに

近年、学校教育における課外のスポーツ活動（以下、運動部活動という。）ではさまざまな問題が表出しており、その原因究明及び解決のための方途を構築することが緊急の課題と言えよう。例えば、運動部活動の時間が非常に長い事例がある。いわゆる、スポーツ有力校といわれているような学校では、始業前での練習と放課後の練習が元旦を除く毎日実施されていたり、ほとんどそれに近い状況で行われている。次に体罰・制裁(入沢, 2004a)の問題がある。これには①指導者から生徒(部員) ②生徒(部員) から指導者③生徒間(部員間)のもの、等が指摘されている。また、各学校段階の大会で優勝することが絶対的な目標となる勝利至上主義的な傾向の指導(辻, 2001a)やバーンアウト（(スポーツの燃え尽き症候群(文部省, 1999) ともいう)）またはドロップアウト(中込・岸, 1991; 土屋・中込, 1998; 横田, 2002; 北村, 2006)といわれる問題がある。さらには部員間におけるいじめ(入沢, 2004b)の問題がある。本稿の執筆中にも某中学校の女子バスケットボール部員が自殺した事件が発生した。自殺の原因が遺書によって明らかになり、他の部員からのいじめがあったと報道されている。その他、指導教員の高齢化に伴う活力低下(木村, 2000)や少子化による部員不足の問題などがあげられるものの、ここでは問題提起のみにしておく。

以上のように社会問題化している学校の運動部活動であるが、本来、スポーツの語源は、ラテン語の **deportare** (デポルターレ) にさかのぼり、人間の生存に必要な不可欠なまじめなことから一時的に離れること、すなわち気晴らしする、休養する、楽しむ、遊ぶなどを意味していた。それが中世フランス語で **desport** (デスポール) となり、14 世紀にはイギリス人が **disport** に転じたものの、16 世紀には **sporte**、あるいは **sport** と省略されて使われるようになり、現在に至っている(佐伯, 1987a)。

また、佐伯(1987b) はスポーツの定義について、「ことばの意味の変遷からみられるように、それぞれの時代や社会における、遊びや休養・娯楽生活のおくり方と深くかかわっており、その意味・内容は固定的でなく、時代や社会の慣習によって変化してきた」と述べた上で、ヨーロッパみんなのスポーツ憲章(1975)をもとに、「競争的なゲームおよびスポーツ、野外活動、美的運動、調整運動の4つのカテゴリー」で捉えたもの、すなわち、「ダンスや体操を含め、楽しみや健康を求めて行われる運動のすべて」としている。

さらに佐伯(1996) は、現代のスポーツ世界を組織化・制度化の水準からも捉えている。それによれば、最も未組織なものが「インフォーマル・スポーツ」、ある程度組織化・制度化されているものが「セミフォーマル・スポーツ」、社会制度として確立しているものが「フォーマル・スポーツ」及び企業活動として組織化・制度化されているものが「プロ・スポーツ」と述べている。これらの4層は、ゲームとしての「行うスポーツ」を基底に示したものと考えられる。

一方で服部(2006) は、最新の事典で次のように総括している。「スポーツという言葉には大きく3つの意味があり、第1に、ルールに基づいて身体的能力を競い合う遊びの組織化、制度化されたものの総称。第2には、健康の保持増進や爽快感などを求めて行われる身体活動。第3の意味としては、知的な戦略能力を競い合う遊びを指して呼ぶことがある。」

近代スポーツが日本に紹介されたのは、19世紀後半から20世紀にかけてだといわれている。既に競技性の高かったそれらの「行うスポーツ」は、主に学校体育の授業や運動部活動で取り上げられ普及していった(増田, 1995; 浅見, 2001)。現代では競技スポーツのトップレベルに位置する選手のプロ化が進んでいる反面で、もともとはアマチュアスポーツ選手の最高峰を競う大会であったオリンピックがプロ選手でも出場可能なイベントとなり、そのテレビ放映権を巡ってはビッグマネーが飛びかうなど由々しき事態となっている(時本, 1995)。

ところで、我が国の学校における教育課程(curriculum)は学校教育法施行規則のほか、基準として示されている学習指導要領(以下、指導要領という。)によって編成することになっている。平成元年に公示された小学校、中学校及び高等学校の指導要領では、「体育」、「保健体育」について各学校種を通じて、生涯スポーツと体力の向上を重視する観点から内容の改善を図り、児童生徒が自ら進んで運動に親しむ態度や能力を身につけるとともに、自発的、自主的に運動ができることを目指したものになった(文部省, 1992)。さらに、平成10年7月の教育課程審議会答申をふまえて、同年末に改訂指導要領の告示が行われた。その中で注目すべきことは、児童生徒のアンバランスな心身の現状に対応し、生涯にわたる豊かなスポーツライフ及び健康の保持増進の基礎を培う観点に立って、体育や保健の内容の改善を図ったところである(文部省, 1999a)。これらは、学校体育の具体的目標を生涯スポーツにつながる能力及び態度の育成という観点で示したものである。

スポーツ振興のための基本的な方策として、『スポーツ振興基本計画』が1999年9月に策定された。この計画は、『スポーツ振興法』(1961)に基づき、2001年度から2010年度までの10年間で達成すべき目標や具体的施策などについて定めたものである(文部省, 2000)。後述するように、総論では「みるスポーツ」や「支援するスポーツ」についてもふれているものの、各論では次のような3点を柱として、「行うスポーツ」に力点がおかれていると考えられる。

- ①生涯スポーツ社会の実現に向けた地域におけるスポーツ環境の整備充実
- ②我が国の国際競技力の総合的な向上

③生涯スポーツ・競技スポーツと学校体育・スポーツとの連携推進

ただし、この計画は2005年度に評価・見直しがなされ、修正後の3本柱は次のように示されている(文部科学省, 2006)。

①スポーツの振興を通じた子どもの体力の向上

②生涯スポーツ社会の実現

③国際競技力の向上

ついで、生涯(学習としての)スポーツについて論考する。月刊学術雑誌『体育の科学』(2006年2月号)は、「生涯スポーツのすすめ」と題した特集を組んでいた。その理由には、今日の少子高齢社会において私たち一人ひとりが生きている長さの中で、「認知症や寝たきり状態にならず、心身共に健やかであるほか、社会的な繋がりも保てる期間」(「健康寿命」(芳賀, 2004))をいかに延ばすかが大きな課題であり、生活習慣病の予防が大きな鍵となっていることなどが考えられる。それゆえ、現代社会においてはヒトの身体能力の限界に挑むチャンピオンスポーツ(プロを含む)が最も華やかで脚光を浴びるもの(「みるスポーツ」)であり、健康・体力づくりのためには適度に身体を動かすこと、すなわち「行うスポーツ」を生活の一部にしていくことが期待されているのであろう。

文部科学省(2004)はスポーツの意義について、「人生をより豊かにし、充実したものとするとともに、人間の身体的・精神的な欲求に答える世界共通の人類の文化の1つである。心身の両面に影響を与える文化としてのスポーツは、明るく豊かで活力に満ちた社会の形成や個々人の心身の健全な発達に必要なものであり、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことは、極めて大きな意義を有している。」と述べている。また、前述した『スポーツ振興基本計画』(2000)では、「人間とスポーツとのかかわりについては、スポーツを自ら行うことのほかに、スポーツをみて楽しむことやスポーツを支援することがある。スポーツをみて楽しむことは、スポーツの振興の面だけでなく、国民生活の質的向上やゆとりある生活の観点からも有意義である。また、スポーツの支援については、例えば、ボランティアとしてスポーツの振興に積極的にかかわりながら、自己開発、自己実現を図ることを可能とする。人々は、このようにスポーツへの多様なかかわりを通じて、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現していくのである。従って、スポーツへの多様なかかわりについても、その意義を踏まえ、促進を図っていくことが重要である。」と述べている。

これらを参考に、筆者は生涯(学習としての)スポーツを次のように捉えている。すなわち、それは生涯にわたって継続される活動の1つとしてスポーツを学習することであり、学習者本人の持続的な学習意欲あるいは学習要求に支えられるものである。また、スポーツの分類については山口(2004)と山口県体育協会(2005)を参考に、図1に示すような「行うスポーツ」(Do Sport)、「みるスポーツ」(Spectator Sport)、「支えるスポーツ」(Sport Volunteer)、「つくるスポーツ」(Sport Planning)の関わり方があるだろう。これらのうち第2、第3及び第4の享受の仕方は、これまでほとんど取りあげられてこなかったためか、バドミントンを上記のような4つの観点から検討したものは見当たらない。しかし

ながら、今後の社会では多様なかたちでスポーツを享受する（楽しむ、学習する）ことがきわめて重要になってくると思われる。

本稿の目的は、生涯スポーツ論からみたバドミントンの4つの関わり方（楽しみ方）についての知見を提案することである。なお、「行うバドミントン」については筆者が長年関わってきた初心者や初級者を対象とした実践的研究の成果に基づいた指導体系論を中心に述べる。

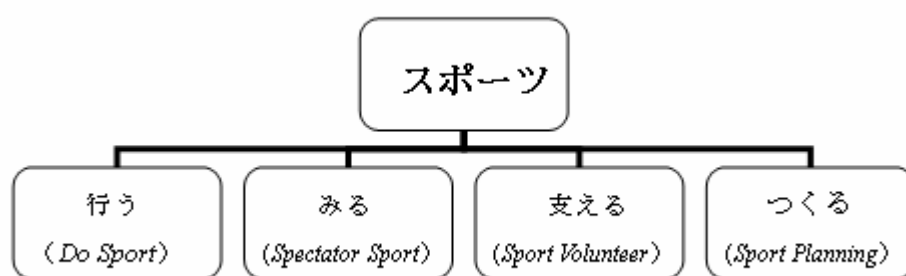


図1 生涯学習社会におけるスポーツ享受の分類

2 「行うバドミントン」の楽しみ方

（1）我が国への移入時期と学校体育での取り扱い

我が国に競技としてのバドミントンが紹介されたのは、1930年代にYMCAの体育主事が欧米視察から帰国した後といわれていた(兵藤, 1972; 松田, 1980)。しかしながら、近年の研究(吹田, 2003)では、1919年11月に名古屋YMCAにおいて、アメリカ人のBrownが正規のルールによる「第1回体育指導者講習会」を指導したらしい。一方、学校体育におけるバドミントンについてみると、昭和20年代に中学校の選択教材として取り上げられたことがある。けれども、当時流行したレクリエーションや軽スポーツの1つとして安売りされたために、(初歩的段階の指導がほとんど行われず)ラケット及びシャトルの損傷が激しくて費用がかかりすぎ、教材としては不適切だということになり、削除された経緯がある(伊藤, 1971)。その後、中学校第3学年の「球技」種目の代替(1969年、中学校指導要領)として復活した。さらに、学校や地域の実態を考慮して加えることが出来るようになり(1977年・中学校、1978年・高等学校)、改訂の指導要領(1988年・中学校、高等学校)では「球技」種目の1つに加えられた。特に高等学校では、「個性を生かす教育と生涯体育・スポーツの基礎づくりの観点から、運動種目を生徒が選択して履修できるようにすることを重視している」(高山, 1997)。

（2）バドミントンの特性

バドミントンは、ラケットとシャトルコック（以下、シャトルという。）を用いて行うネ

ット型のスポーツである。このスポーツは、ネットを挟んで対峙するので、競技中、プレーヤーの身体接触がない。そのため、相手側のエンド（＊ バドミントンでは、コートネットをネットで2分した区域をエンドという）にシャトルを返すことが必要条件となる。

筆者ら(1993)はバドミントンの競技的（一般的）特性及び競技規則（正式ルール）にこだわらず、息抜きやストレス解消などのために行う場合のレクリエーション的特性(以下、レクの特性という。)を下記のように報告した。レクの特性は、学校体育では「学習者からみた特性」といわれるものに相当する。行うバドミントンの初歩的・初級的段階では、これらの特性を享受できるような練習プログラムが必要ではないかと考えている。

◎競技的 特性	・ ネットを挟んで対峙したプレーヤーが、シャトルとラケットを用いて打ち損じるまで交互に1回ずつ打ち合う、シングルスとダブルスからなる競技である。
------------	--

◎レク 的特性	<ul style="list-style-type: none"> ・ シャトルを落とさないで、ラリーが続くようになると楽しい。 ・ シャトルのフライトの変化に応じた身のこなしができ、打ち返せるようになると楽しい。 ・ ショットが決まると楽しい。 ・ ダブルスのゲームで、ペアが協力して勝てると楽しい。 ・ ラリーが続かないと面白くない。 ・ 対戦相手が強すぎると面白くない。 ・ ダブルスのゲームで、ペアの呼吸が合わず、うまく返せないと面白くない。 ・ シャトル自体が悪くなり、飛びすぎるか、あるいは殆ど飛ばなくなってしまうと面白くない。
------------	---

（3）行うバドミントンを楽しむために必要な練習プログラムの体系化

バドミントンを「行い」楽しむためには、第1に、バドミントンの技術の指導体系に基づいた学習プログラムが構築されていることが大切である。これは、全てのスポーツ（種目）に必要なことだが、体系化するのは容易なことではない。例えば、ラケットを握る以前の段階でどのような練習（学習）が望ましいのか明らかではない。また、ストロークの指導過程についても明確なプログラムがあるわけではない。筆者らは拙稿(1993, 1996)でこれらを指摘したが、その時点では具体的なプログラムの提示はできていなかった。その後、筆者は実践研究の成果を日本スポーツ方法学会（2003, 2004）において発表したもので、以下にそれらを紹介していく。

まず、バドミントンの基本的技術には、ラケットの握り方（grip）があげられる。テニスではイースタングリップやウエスタングリップと呼んでいるが、バドミントンもそのように呼ぶのが一般的であった。しかし阿部・渡辺(1985)、筆者(1995)、Edwards(1997)及び飯野(2001)等はフォアハンド及びバックハンドと呼んでいる。筆者はラケットの外縁

(frame) が床に対して垂直になるように握り、ラケットの面 (face) が手の掌側になる時の握り方をフォアハンド、反対に手の甲側になる時の握り方をバックハンドと呼ぶようにしている。なおバックハンド時の親指は、第1関節に力を入れて立てるようにする（一般的にサムアップと呼ばれている。）と良い。いずれにしても、常に同じ grip ではなく、ストロークに合わせて適宜変えるほうが実戦的である。

次に個人的技術の3要素としては、サービス (service)、ストローク (stroke) 及びフットワーク (footwork) をあげることができる。サービスは、フライト (flight) の距離によって、ショート (short) とロング (long) の2系に大別される。ただし、ロングサービスライン付近を狙って（*高さは、レシーバーのラケットが届かないくらいで頭上を素早く飛び越えるもの）打つものに、ドリブンまたはフリックといわれるものもある。

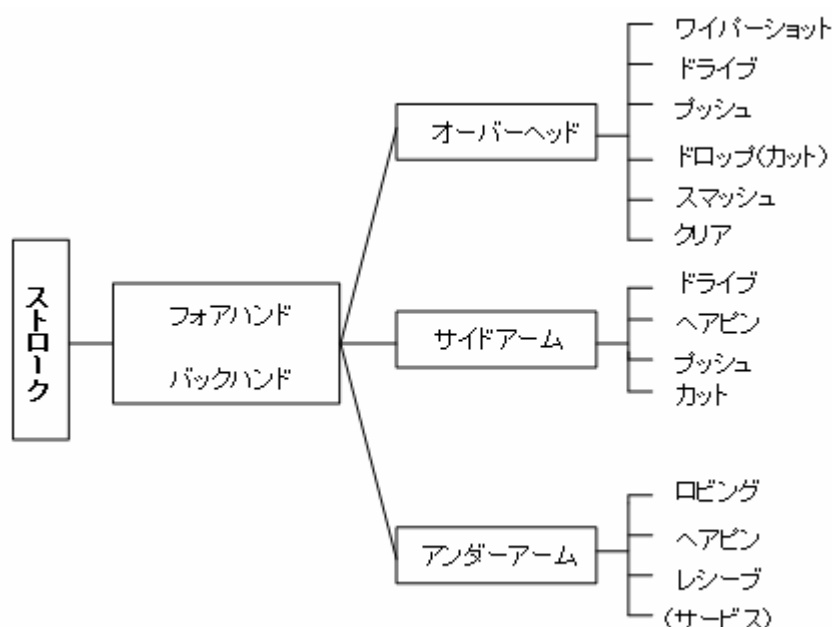


図2 ストロークの分類とショット

図2はストロークの種類とショット (shot) をまとめたものである。ストロークはラケットでシャトルを打つことであり、テイクバックからフォワードスイングを経てインパクトを迎え、フォロースルーまでの一連の動作をいう。ストロークにはフォアハンドとバックハンドがあり、ラケットスイングの軌道とインパクトポイントなどからアンダーアーム、サイドアーム及びオーバーヘッドの3系になる。

また、表1に示すアンダーアームストロークの練習課題は、筆者が拙著(1995)をもとに大学の授業等で実践したものをまとめたものである。これらの指導上の重要な留意点には、課題ごとの達成規準を設定することがあげられる。課題2であれば、フォアハンドが30回程度連続して突けたら、バックハンドに進めるようにすると良いだろう。しかし授業では、全員が一斉にそれを達成することは至難であった。授業のように限られた時間の中で

練習する場合に生じる個人差は、個々の体力レベルや運動経験の違いが、習得しようとする技術の習熟にも影響するためと考えられる。本来は、一つひとつの課題の規準を達成してから次の課題に進むほうが習熟も早いため、このプログラムは易しい課題から難しい課題へと体系的に組んでいるつもりだが、まだまだ修正が必要だと考えている。

表 1 アンダーアームストロークの練習課題

- | |
|---|
| 1. シャトルをラケットにのせる(ネット無)<forehand, backhand> |
| 2. その場シャトル突き(")<forehand, backhand, fore and back> |
| 3. その場高低突き(")<forehand, backhand, fore and back> |
| 4. 歩行シャトル突き(")<forehand, backhand, fore and back> |
| 5. 小走りシャトル突き(")<forehand, backhand, fore and back> |
| 6. 2人組シャトル突き(")<forehand, backhand> |
| 7. 4人組シャトル突き(")<forehand, backhand> |
| 8. 2人組シャトル突き(弛ませたネット)<forehand, backhand> |
| 9. 2人組シャトル突き(張ったネット)<forehand, backhand> |
| 10. ヘアピンにつなげる(")<forehand, backhand, fore and back> |
| 11. ヘアピン(")<forehand, backhand, fore and back> |
| 12. ショートサービスにつなげる(弛ませたネット)<forehand, backhand> |
| 13. ショートサービス(張ったネット)<forehand, backhand> |
| 14. その場シャトル拾い(ネット無)<forehand, backhand> |
| 15. その場シャトルホールド(")<forehand, backhand> |
| 16. 2人組シャトルホールド(")<forehand, backhand> |
| 17. 2人組シャトルホールド(弛ませたネット)<forehand, backhand> |
| 18. 2人組シャトルホールド(張ったネット)<forehand, backhand> |
| 19. ロングハイサービスにつなげる(")<forehand> |
| 20. ロングハイサービス(")<forehand> |
| 21. ネット前ロビングにつなげる(")<forehand, backhand> |
| 22. ネット前ロビング(")<forehand, backhand> |

フットワークは、シャトルのフライトに応じて自陣のエンド（＊ バドミントンでは、コートとは言わない）を移動することである。ダブルスではペアとのコンビネーションも要求されるが、瞬時に判断して動けること（敏捷性）はバドミントン・プレーヤーに欠かせない素養である。

第2に大切なものは、第1で明らかになった基礎・基本の技術をしっかり身につけるこ

とである。これは、じっくり時間をかけて練習（学習）した結果としての基礎的技術の獲得（習得）が、より発展した（高度な）技術の習得に繋がるからである。じっくりというのは、与えられた課題をずっと練習するという意味ではなく、体系化されたいくつもの課題を「スモールステップ」の原理・原則で、一つひとつ達成させていくような方法をいう。ただし自分の身体の動かし方を意識して、課題に取り組めるようになるための学習訓練（練習）も同時に必要である。

図3は、プレーに必要な技術の習熟過程モデルを示したものである。たて軸は技術の達成水準、横軸は習熟度とした。練習を始めたばかりの初心者の技術は、他のスポーツと同様に荒削りで、練習課題を正確にこなすまでには至らない。つまり達成水準が低いといえる。しかしながら適切な指導プログラムの下、前述したような方法で練習課題に取り組むと、それらの技術も習熟して質的に高まっていく。さらに練習やトレーニングを積み、より高度な技術を獲得したり、たくさんのゲームなどを経験することで、中級者や上級者にステップアップしていくものと考えられる。また指導者は、個々の身体の発育・発達や体力レベルに応じてプログラムを適切にアレンジする必要がある。すなわち、次節で述べるような指導者の資質の有無にも影響されるのである。

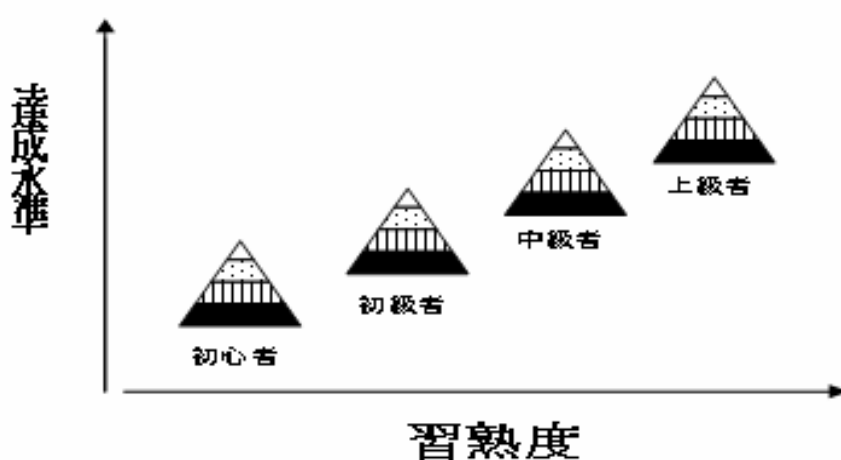


図3 バドミントンに必要な技術の習熟過程モデル

第3は、体育館等の運動施設がいつでも利用でき、しかも一緒に楽しむ仲間がいることで、スポーツ活動への参加に張り合いを持つことが大切である。バドミントンの競技特性としては、前述した中から「ラリーが続くこと」を真っ先にあげたい。屋外で羽根つきのようなバドミントン（以下、「羽根つきバド」という。）を行っている場合でも、風に煽られてラリーがほとんど続かない状態では楽しめない。たとえ「羽根つきバド」であっても、室内のほうが楽しさは倍増する。現状では、行いたい時に安価で借りられる体育館や気軽に参加できるような行事・イベントは少ない(中ほか, 1993)。したがって、公共運動施設や

学校施設の利用・開放時間の拡充、企業の体育館や運動施設をいっそう地域社会に開放することが求められる^{注1)}。また、有資格のスポーツ指導員が配置されている「総合型地域スポーツクラブ」^{注2)}が増えれば、これまでのような問題も多少解消されていくだろう。ちなみに、2006年度現在の群馬県体育協会指定クラブは「群大クラブ」をはじめとする7団体に止まっている(日本体育協会, 2006a)。

(4) アスリートを育てる指導者としての要件

我が国のスポーツ指導者、特に運動部活動における指導者は久保(1998)が指摘しているように、「教育的な活動」と「競技力向上をねらいとした活動」との2面性を担ってきた歴史がある。これらの二重構造(教師の身分とコーチの立場)は、現在進行中の「総合型地域スポーツクラブ」が順調に発展することになれば、幾分か解消されていくことになるだろう。

ところで、名選手が必ずしも名監督・コーチ(指導者)になれるとはいえない。むしろ、そのスポーツの競技経験がなくてもすぐれた指導者として名声をあげた人たちの多い。では、指導者に求められる資質にはどのようなものがあるのだろうか。アスリートを数多く輩出したことで著名な LEGGET(1983)は、次のような理想的なコーチとしての条件を示している。

- ①人が好きで楽しみが分かり、人間の中で目的を達成する機会を得る人。
- ②スポーツが好きで、自分が知っていること全てを他人に教えたいと思う人。
- ③団体の中(学校やチームなど)や外部の人たちともうまくやっていける人。

また島田(1998)は、スポーツ・コーチングのポイントとして10の要件をあげて、次のようにまとめている。「成功的なスポーツ実践指導には、深い専門的知識や智慧、高い見識と哲学が望まれる。成功的なスポーツ実践指導とは、まず学習者の願い、基本的欲求を理解して、彼らの夢、希望を叶えてあげようとする精神である。次に、無駄の少ない効率的、経済的、効果的な指導を展開することである。スポーツ指導者にとって大切なことは、学習者と気持ちを共有し、何よりもスポーツに対する価値観を人一倍持つことによって、成功的な取り組みが可能となるだろう。」

さらに、出典は不明だがアメリカの指導者論の中には、コーチ(COACH)の頭文字5つを上から順に並べて、その資質について述べているものがあるようだ。それは、①Comprehension(理解する力)②Outlook(先を見通す)③Affection(愛情)④Character(性格)⑤Humor(ユーモア)である。著者の辻は、我が国の指導者に欠けているものが⑤ではないかと指摘している(辻, 2001b)。

これらに共通する点もあるが、筆者はアスリートを育てる指導者(* どちらかといえば、運動部活動よりも総合型地域スポーツクラブにおける専門職を想定している。)には、次のようなことが必要だと考えている。

- ①損得考えずに教えることが好き。

- ②そのスポーツの魅力（醍醐味）が分かっている。
- ③研究（指導に関することを学ぶ姿勢）熱心で柔軟なものの考え方が出来る。
- ④正しい指導理論を修得している。
- ⑤負けず嫌い。
- ⑥目先のことよりもずっと先の選手の成長が見通せる。
- ⑦心身共に健やか。

以上のような要件を備えた指導者は、試合では選手とともに戦い、練習場面ではトレーニングを指揮する立場といえるので「行うバドミントン」に取り上げた。なお、「支えるスポーツ」としてのバドミントンの楽しみ方に重複する部分もある。その詳細については次章で述べることにする。

表2 2006年度 第1種年次大会（18年4月～19年3月）

<日バ協 HP から抜粋>

大会名	開催期間	開催地
第56回全日本実業団バドミントン選手権大会	6月28日～7月2日	東京都
第24回全日本レディースバドミントン選手権大会	7月28日～7月30日	石川県
第57回全国高等学校バドミントン選手権大会	8月1日～8月6日	奈良県
第22回若葉カップ全国小学生バドミントン大会	8月4日～8月7日	長岡京市
第30回全日本高等専門学校バドミントン選手権大会	8月5日～8月6日	京都府
第45回全日本教職員バドミントン選手権大会	8月9日～8月12日	京都府
第36回全国中学校バドミントン大会	8月17日～8月20日	徳島県
第7回全国小学生ABCバドミントン大会	8月18日～8月20日	千葉県
日本スポーツマスターズ2006バドミントン競技	9月15日～9月19日	広島県
第49回全日本社会人バドミントン選手権大会	9月15日～9月20日	石川県
第25回全日本ジュニアバドミントン選手権大会	9月21日～9月24日	愛知県
第61回国民体育大会バドミントン競技会	10月1日～10月4日	兵庫県
第23回全日本シニアバドミントン選手権大会	10月7日～10月9日	北海道
第5回日本バドミントンジュニアグランプリ2006	10月21日～10月22日	宮城県
第19回全国スポーツ・レクリエーション祭	10月21日～10月24日	鳥取県
第57回全日本学生バドミントン選手権大会	10月27日～11月2日	京都府
平成18年度全日本総合バドミントン選手権大会	11月14日～11月19日	東京都
バドミントン日本リーグ2006	10月28日～12月24日	大阪府他
第15回全国小学生バドミントン選手権大会	19年1月4日～1月8日	大分県
第1回全日本レディースバドミントン競技大会（個人戦）	19年2月28日～1月3日	大阪府
第7回全日本中学生バドミントン選手権大会	19年3月25日～3月27日	福井県
第35回全国高等学校選抜バドミントン大会	19年3月25日～3月28日	北海道

3 「みるバドミントン」と「支えるバドミントン」の楽しみ方

(1) 「みるバドミントン」の楽しみ方

これには、大会会場（体育館やグラウンド等）においてプレーを直接観戦するものとテレビなどのメディアを通して間接的に観戦（応援）するものが考えられる。

SSF 笹川スポーツ財団（以下、SSF という。2006a）が調査したスポーツ観戦の状況によると、過去1年間にスポーツ施設などで直接観戦した人の割合は成人で 37.1%、10代が 40.9%であった。これを過去の調査と比較すると両者ともに増加傾向であった。また、観戦種目は成人の第1位がプロ野球、第2位が野球（プロ以外）、第3位がマラソン・駅伝などとなっている。10代では第1位がプロ野球、第2位が野球（高校、大学など）、第3位がJリーグなどとなっている。残念ながら、バドミントンはベスト10に入っていなかった。プロスポーツの観客動員数については、2004年シーズン1年間でおおよそ8388万人に達しており、公営競技を除いて最も観客が多かったのはプロ野球（2445万人）となっている。

表2は日本バドミントン協会（以下、日バ協という。2006）のホームページ（HP）に掲載されている2006年度のスケジュール表を抜粋したものである。今年（2006年）は2年に1度の世界一を競う国別対抗戦（男子：トマス杯、女子：ユーバー杯）が、我が国で開催された。準決勝以上の試合会場となった東京体育館は、観覧席が1万人分とれ国際バドミントン連盟（IBF）が求める条件に見合っている（バドミントンマガジン編集部, 2005）。ちなみに、会期中に1万人の満員御礼が出た（バドミントンマガジン編集部, 2006a）といわれているが、準決勝以上のSS席は前売り券が1万円（当日券1万2千円）であった（バドミントンマガジン編集部, 2006b）。

バドミントンの主要な大会を取り上げるテレビ番組は、これまで年に数回あれば良いほうだった。しかしながら、近年では衛星放送やケーブルテレビジョン等によって、バドミントンの試合を多く見る事が可能になった。特にSKY PerfecTV！（スカパー！）の752ch（チャンネル）は卓球・バドミントンの専門であるため、主要な大会以外にもライブ（生中継）または録画でみる事ができるらしい。これらの情報は、わが国唯一の月刊バドミントン専門雑誌の『バドミントンマガジン』（2006年11月号及び他号）にも記事や広告が載っている。ただし、筆者はスカパー！とは未契約のため見たことはない。

一方で、2006年5月のIBF総会（東京）によって決定された21ポイントラリー制の導入（バドミントンマガジン編集部, 2006c）は、テレビ放送で取り上げられる可能性を高めたものと考えられる。旧ルールではサービス権のあるほうのみにポイントが加算されたため、サービス権の移行が何度も繰り返されて、ゲーム時間が延び延びになることが多かった。今のところ、ルール変更に伴う試合への影響等については検証されていないが、以前に比べて試合時間が激減したことは、放送局側から見ればコマーシャル時間がほぼ確定できるなど、取り上げ易くなったといえるだろう。その他、雑誌や新聞などのメディアに取り上げられた写真を見たり、記事を読むことなどの楽しみ方も「みるバドミントン」に加えた

い。以上のような「みるバドミントン」では、アスリートをアイドルと同様に「追っかけ」の対象とするものから、友人や知人のプレーを純粋に「応援」するものまで様々な理由が考えられる。また、「みるスポーツ」は知的・感性的享受を代表するスポーツ享受のスタイルであるといわれている（佐伯, 1996）。したがって、「みるバドミントン」においては、バドミントンのルールについて考えたり、新たに発見したことについて探究すること、さらには素晴らしいプレーに感動することなどの楽しみ方があるだろう。

（２）「支えるバドミントン」の楽しみ方

この対象には無報酬でプレーヤーを指導するコーチ、大会（イベント）の裏方で支えるボランティアなどが考えられる。日本体育協会（以下、日体協という。）の公認スポーツ指導者制度が 2005 年 4 月から改定され、新たな制度に基づいた指導者養成がスタートした。その資格は、①基礎資格②競技別指導者③フィットネス指導者④メディカル・コンディショニング指導者⑤マネジメント指導者に区分されている。①については制度改定により新設された資格で、地域住民のスポーツの生活化・定着化を推進するためのスポーツ指導者である（SSF, 2006b）。これらについては、最新データが日体協（2006b）の HP に掲載されている。平成 17 年 11 月 9 日現在、競技別指導者の登録者総数は 106515 人である。内訳をみると、サッカーの 22656 人が最も多く、次いで水泳が 20669 人、スキーが 7578 人で 3 番目に多くなっている。さらに、その中から抜粋して作成したものが表 3 である。バドミントンについては、指導員が 2068 人（全体の 2.3%）、コーチが 152 人（全体の 1.0%）となっている。教師は商業スポーツ施設などで専門的指導にあたる者で、今のところ水泳やスキー及びテニスなどの 7 競技（資格）だけに認定された 4930 人しかいない。

表 3 日本体育協会公認競技別指導者の登録者数（平成 17 年 11 月 9 日現在）

＜日体協 HP から抜粋＞（人）

資格名	指導員			コーチ			教師			合計
	指導員	上級指導員	小計	コーチ	上級コーチ	小計	教師	上級教師	小計	
全体	73568	15877	89445	8577	3563	12140	3325	1605	4930	106515
バドミントン	1541	527	2068	125	27	152	0	0	0	2220
割合 (%)	2.1	3.3	2.3	1.5	0.8	1	0	0	0	2.1

バドミントンは柔道や剣道といった武道のような段位制度がないため、上記の資格は指導者としての資質を判断する上で価値が認められる。しかし保健体育の教員免許を持った熱心な運動部活動の指導者などは講習会への出席が難しいだろう。前述したように、「総合

型地域スポーツクラブ」では資格を持った指導者を配置することになっているが、現在の有資格者数では到底まかないきれない。バドミントンが好きで教えることも大好きな人の中には、無報酬でも良いからコーチを行いたいと思っている人が多く存在するに違いない。かくいう、筆者もその1人である。

次に、バドミントンの大会やイベントの裏方で支えるボランティアについて考える前に、スポーツ・ボランティアとは何かを明らかにしておく。それは、「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり、また、国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支える人」(SSF, 2004)と定義されている。それらの実態について調査した報告書によれば、わが国成人のスポーツ・ボランティアの実施率は1994年から2004年までの10年間、7%前後で推移しており、成人の1割にも達していないことが分かった。また10代の実施率については、過去1年間にスポーツ・ボランティア活動を実施したことが「ある」と回答したものが13.3%と成人の7.9%を上回っていた(SSF, 2006c)。その活動内容については、前者が「大会・イベントの運営や世話」や「団体・クラブの運営や世話」が多いのに対して、後者は「グラウンドなどの会場整備や用具の片づけの手伝い」や「審判や審判の手伝い」の割合が高く、両者の役割が異なっているように推測される。

バドミントンのボランティアについては、日常的な「クラブ・団体ボランティア」と非日常的な「イベント・ボランティア」が考えられる。前者は、地域スポーツクラブ（総合型を含む）やスポーツ団体において監督やコーチを務める指導者及びアシスタント指導者がある。また、クラブや団体における役員や幹事、練習時の給水を担当する世話係、試合会場への運搬・運転係、会報や情報処理の係など考えられるが、有給の理事職等を除く大部分が「運営ボランティア」と位置づけられる。後者は地域の大会、県大会、さらには全国大会、日本リーグ及び国際大会等を支えるボランティアを指している。その中には審判員や通訳、医療救護係等の「専門ボランティア」と案内・受付、記録・掲示、選手の滞在・訪問を受け入れるホストファミリーなどの「一般ボランティア」が考えられる。もう1つは、トップアスリートによる福祉施設への慰問等の活動で「アスリート・ボランティア」と呼ばれているものがある(山口, 2004)。

これらの活動を通して達成感や充実感を味わうこと、あるいは自己実現の豊かな心を育むことなどが享受できるのが「支えるバドミントン」である。ただし、指導への過度な没頭によって生活に支障をきたすことがない程度の活動にとどめたい(松尾ほか, 1994)。

4 「企画するバドミントン」の楽しみ方

これには、まずバドミントンの大会（イベントを含む）及び実技講習会（教室）などを企画立案すること。さらに、それらを実施して成功した時の満足感や達成感などを味わう

享受の仕方が考えられる。

大学生のバドミントンについてみると、例えば各地区大学連盟の主催するリーグ戦等が行われているため、各地区に学生バドミントン連盟（以下、学連という。）が組織されている。関東学連(2006)のHPによれば、名誉会長・会長・副会長（計4名）を除く委員（計13名）は全て学生で構成されている。学生バドミントンの場合は、伝統的に各地区の学連が春と秋のリーグ戦をはじめとする各種大会を企画し、主体的に運営している。これらの委員等での貴重な経験は、卒業後に地域でバドミントン大会を企画したり、あるいはクラブを運営する機会が訪れた時などに必ず役立つであろう。

また大会では会場使用料の他、開催要項やチーム等を紹介するパンフレットが一般的に作成されている。それらの経費は、当該年度の登録料や大会参加費及び企業等の協賛金などから支払われるだろう。バドミントンの場合は、用具用品メーカーとスポンサーシップ^{注3)}になっていることが多いものと考えられる。

イベント等を開催するにあたりスポンサーの存在は必至であるが、スポンサー企業は「募集する」のではなく「獲得する」ものと考えられている。それらの企業には、パートナーとして最も適合する企業が絞られることになり、スポーツ組織と共にイベントを支えるビジネス・パートナーとなる。また、スポンサー料金は「寄付金」ではなく「投資金」の意味合いもある。つまり、その目的が地域社会貢献である場合は、スポーツイベント等をスポンサードしていることを地域住民に認知させ、投資に見合った見返りを創造することが重要だといわれているからである(藤本, 2006)。

一方で、企画するバドミントンの楽しみ方としての例ではないが、過日（2006年10月24日）NHK総合テレビの番組を見る機会があった。それは、川崎市中原区において12チーム（うち、1チームは中学生）が参加してのフットサル大会が開かれたという情報であった。この大会を企画したのは早稲田大学の3年生であった。彼は昨年1年間大学を休学し、世界一周の旅に行ってきた。その旅行で印象的だったのは、地雷爆破の恐怖にさらされている国の人々であった。大会参加費13000円のうち、会場使用料や諸経費を差し引いた金額がすべて寄付となるが、12チーム分の金額でフットサルコート1面の広さにある地雷を撤去する費用に充てられるとのことであった。このような国際的な視野からみた社会貢献活動をバドミントンでも企画し、実施することは不可能ではない。

もう1つは、バドミントンを行うために必要な施設を設計したり用具を開発することなどが考えられるが、これらは建築工学やスポーツ工学的な専門分野であるため、ここではふれずに割愛する。

5 おわりに

本稿では、生涯スポーツ論の観点からバドミントンをとらえ、4つの関わり方（楽しみ方）について検討した。すなわち、バドミントンの楽しみ方には（1）自らが行うこと、あるいはアスリートの指導者として自己実現すること、（2）試合を直接的・間接的に観戦することでルールについて考えたり、新たに発見したことなどを探求すること、あるいは素晴らしいプレーに感動すること、（3）大会の支援スタッフや審判員などで関わること、あるいは選手を直接的・間接的にサポートすること、（4）大会やイベントなどを企画すること、が考えられた。

アマチュア選手が一線から退くときには、引退という言葉はふさわしくないと思われる。バドミントンは、ライフステージに応じて楽しめるスポーツのひとつである。一線プレーヤーとしてのピークを過ぎた後は、大会出場を目指して行うのではなく、自らの「クオリティー・オブ・ライフ(QOR)」のために、指導者やイベント・ボランティア及びプランナーとして活躍することを是非とも勧めたい。

注

1) 体育・スポーツ施設の設置数は 239660 箇所である。そのうち学校体育・スポーツ施設は 149063 箇所 (62.2%)、大学・高等専門学校の体育施設は 9022 箇所 (3.8%)、公共スポーツ施設は 56475 箇所 (23.6%)、職場スポーツ施設は 8286 箇所 (3.5%)、民間スポーツ施設は 16814 箇所 (7.0%) となっている。(文部科学省「体育・スポーツ施設現況調査」平成 16 年)

2) 「スポーツ振興基本計画」(2000)によると、今後 10 年間で各市町村に 1 つ以上の総合型地域スポーツクラブ及び各都道府県において少なくとも 1 つは広域スポーツセンターを育成することがあげられている。これは、すでにヨーロッパ諸国において定着しているクラブを倣ったものである。わが国が目指している総合型地域スポーツクラブは、次のような概略となっている。①複数の種目が用意されている。②子どもから高齢者まで、初心者からトップレベルの競技者まで、地域の誰もが年齢、興味・関心、技術・技能レベルなどに応じて、行いたいときに、いつでも、いつまでも活動できる。③活動の拠点となるスポーツ施設やクラブハウスがあり、定期的・継続的なスポーツ活動を行うことができる。④質の高い指導者の下で、個々のスポーツニーズに応じたスポーツ指導が行われる。⑤以上のようなことについて、地域住民が主体的に運営する。

3) スポーツ・スポンサーシップとは、スポーツイベントやクラブ、チームを経営するスポーツ組織と、それらに資金や資源を投資または支援する企業との相互交換関係をいう(藤本, 2006)。

文献

- 阿部一佳・渡辺雅弘(1985)基本レッスン バドミントン. 大修館書店: 東京, p. 20.
- 浅見裕(2001)スポーツの歴史. 黒川國児 他編著 生涯スポーツ概論 その理論と実技. 中央法規出版: 東京, p. 28-37.
- バドミントンマガジン編集部(2005)バドミントンマガジン 12月号. ベースボール・マガジン社: 東京, p. 68.
- バドミントンマガジン編集部(2006a)バドミントンマガジン 11月号. ベースボール・マガジン社: 東京, p. 35.
- バドミントンマガジン編集部(2006b)バドミントンマガジン 4月号. ベースボール・マガジン社: 東京, p. 37.
- バドミントンマガジン編集部(2006c)バドミントンマガジン 6月号. ベースボール・マガジン社: 東京, p. 47.
- Edwards, J. (1997) BADMINTON: Technique, Tactics, Training. The Crowood Press Ltd. :UNITED KINGDOM, pp. 19-22.
- 藤本淳也(2006)生涯スポーツイベントとスポンサーシップ. 川西正志・野川春夫編著 生涯スポーツ実践論—生涯スポーツを学ぶ人たちへ—改訂2版. 市村出版: 東京, p. 56-61.
- 芳賀脩光(2004)病気に打ち勝つ生活体力と運動効果:健康長寿のキーワード. 生活体力. 日本放送出版協会: 東京, p. 39-74.
- 服部豊示(2006)スポーツ. (財)日本体育学会監修 最新スポーツ科学事典. 平凡社: 東京, p. 448.
- 兵藤昌彦(1972)バドミントンの技術史. 岸野雄三・多和健雄編 スポーツの技術史. 大修館書店: 東京, p. 625-635.
- 飯野佳孝(2001)日本バドミントン協会編 バドミントン教本 基本編. ベースボール・マガジン社: 東京, p. 17-20.
- 入沢 充(2004a)スポーツの法律入門. 山海堂: 東京, p. 110-113.
- 入沢 充(2004b)同上書. p. 44-48.
- 伊藤基記(1971)中学体育におけるバドミントン指導. 新体育, 41-9:73-76.
- 関東学生バドミントン連盟(2006) <http://www.h6.dion.ne.jp/~kantoren/>
- 木村和彦(2000)スポーツマネジメントとの立場から. 永島惇正編著 スポーツ指導の基礎—諸スポーツ科学からの発信—. 北樹出版: 東京, p. 118-138.
- 岸 一弘(2003)バドミントンの初心者指導体系論(1). 日本スポーツ方法学会第14回大会大会号. p. 15. 及び発表時配布資料.
- 岸 一弘(2004)バドミントンの初心者指導体系論(2). 日本スポーツ方法学会第15回大会大会号. p. 11. 及び発表時配付資料.
- 北村尚浩(2006)青少年スポーツのドロップアウトとバーンアウト. 川西正志・野川春夫編著 生涯スポーツ実践論—生涯スポーツを学ぶ人たちへ—改訂2版. 市村出版: 東

- 京, p. 143-145.
- 久保正秋(1998) コーチング論序説—運動部活動における「指導」概念の研究—. 不昧堂出版: 東京, p. 259-269.
- LEGETT, L. (1983) 理想的なコーチ. 綿井永寿・宇佐美隆憲・時本識資訳 コーチの心得 (PHILOSOPHY OF COACHING). 不昧堂出版: 東京, p. 33-35.
- 松田 稔(1980) 軽スポーツ. YMCA 出版: 東京, p. 28.
- 松尾鉄矢・多々納秀雄・大谷善博・山本教人(1994) ボランティア・スポーツ指導者のドロップアウトに関する社会学的研究: 指導への過度没頭と生活支障の関連及びその規定要因について. 体育学研究, 39:163-175.
- 増田靖弘(1995) 生涯スポーツの理念と推進対策. 日本レクリエーション協会編 生涯スポーツのプログラム. 遊戯社: 東京, p. 11-26.
- 文部科学省(2004) 文部科学白書 平成 15 年度. 国立印刷局: 東京, p. 309.
- 文部科学省(2005) 「体育・スポーツ施設現況調査の概要」.
- 文部科学省告示(2006) 「スポーツ振興基本計画」の改訂について. 別添資料.
- 文部省編(1992) 我が国の文教政策 平成 4 年度. 大蔵省印刷局: 東京, p. 81.
- 文部省編(1999) 我が国の文教施策 平成 11 年度. 大蔵省印刷局: 東京, p. 375.
- 文部省(1999a) みんなでつくる運動部活動—あなたの部に生かしてみませんか—. 東洋館出版社: 東京, p. 8.
- 文部省告示(2000) 「スポーツ振興基本計画」.
- 中比呂志・出村慎一・作野誠一・南雅樹・小林秀紹(1993) 公共スポーツ施設に対する市民の要望に関する研究. 教育医学, 39-2:255-264.
- 中込四郎・岸 順治(1991) 運動選手のバーンアウト発症機序に関する事例研究. 体育学研究, 35-4:313-323.
- 日本バドミントン協会(2006) <http://www.u-netsurf.ne.jp/nichiba/イベントカレンダー>.
- 日本体育協会(2006a) <http://www.japan-sports.or.jp/local/club/10.html/>
- 日本体育協会(2006b) <http://www.japan-sports.or.jp/coach/data/data.html/>
- 佐伯聰夫(1987a) スポーツ. 日本体育協会監修 岸野雄三代表編 最新スポーツ大辞典. 大修館書店: 東京, p. 521.
- 佐伯聰夫(1987b) 同上書. pp. 521-522.
- 佐伯聰夫(1996) 国民生活における「みるスポーツ」の意味と価値—新しいスポーツ・ライフの創造—. 文部省競技スポーツ研究会編 みるスポーツの振興. ベースボール・マガジン社: 東京, p. 13-17.
- SSF 笹川スポーツ財団(2004) スポーツ・ボランティア・データブック. SSF 笹川スポーツ財団: 東京, p. 1.
- SSF 笹川スポーツ財団(2006a) スポーツ観戦状況. スポーツ白書—スポーツの新たな価値の発見—. 笹川スポーツ財団: 東京, pp. 38-39.

- SSF 笹川スポーツ財団(2006b) スポーツ指導者と資格制度. スポーツ白書～スポーツの新たな価値の発見～. 笹川スポーツ財団：東京, pp. 82-87.
- SSF 笹川スポーツ財団(2006c) スポーツ観戦状況. スポーツ白書～スポーツの新たな価値の発見～. 笹川スポーツ財団：東京, pp. 87-95.
- 嶋田出雲(1998) スポーツ・コーチ学—ストリーム理論とトリー理論による勝利への道—. 不昧堂出版：東京, pp. 25-36.
- 吹田真士(2003) 我国における組織的なバドミントン活動の始まりについての予備的な検討. 大学体育研究, 25:1-17.
- 高山一弘(1995) 初心者と指導者のためのバドミントン教本. 上毛新聞社出版局：群馬, p. 22.
- 高山一弘(1997) 球技 バドミントン. 山川岩之助・佐藤良男監修 中学校体育実践指導全集. 日本教育図書センター：埼玉, p. 63-81.
- 高山一弘・上條 隆(1993) バドミントンの初歩的段階の指導に関する基本的な考え方. 群馬大学教養部紀要 27:257-263.
- 高山一弘・上條 隆(1996) バドミントンの初歩的段階の指導に関する基本的な考え方(2). 高崎経済大学論集 39-1:17-35.
- 時本識資(1995) 現代のスポーツをよむ. スポーツ実践研究会編著 スポーツを知る・する・考える —これからのスポーツライフのために—. 不昧堂出版：東京, p. 158-170.
- 辻 秀一(2001a) 痛快！みんなのスポーツ学. 集英社インターナショナル：東京, p. 127-128.
- 辻 秀一(2001b) 同上書, p. 138-142.
- 土屋裕睦・中込四郎(1998) 大学新入運動部員をめぐるソーシャル・サポートの縦断的検討：バーナウト抑制に寄与するソーシャル・サポートの活用法. 体育学研究, 42-5:349-362.
- 山口泰雄(2004) スポーツ・ボランティアの可能性. 山口泰雄編 スポーツ・ボランティアへの招待—新しいスポーツ文化の可能性. 世界思想社：京都, p. 1-14.
- (財)山口県体育協会(2005) http://www.japan-sports.or.jp/yamaguchiken/contents/volun_5.htm/
- 横田匡俊(2002) 運動部活動の継続及び中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動. 体育学研究, 47-5:427-437.

Abstract**How to Enjoy Badminton :
Examination of Four Classifications Seen from the
Lifetime Sport Theory**

Kazuhiro Kishi

“A lifetime sport” means learning a sport as one of the activities continued throughout one’s whole life. The purpose of this paper is to see badminton from a lifetime sport theory perspective, and to propose four ways to enjoy it.

There are four ways to enjoy (or to be involved with) badminton: (1) by playing it or coaching players, (2) by watching and being a spectator, (3) by supporting and volunteering the events, and (4) planning the events.